

虫

あれはもう随分と昔の話になる。そう確か、僕が大学を中退してから3年ほど経った時分のことだ。その年は夏の訪れがいつになく早く、連日のように雲ひとつない炎天下の日々が続いていた。

僕の住んでいた界限はいささか柄^{がら}のよくない下町で、夜中の表通りでは酔っぱらい同士が殴り合いの喧嘩をしていたり、窓からは中年夫婦の言い争う怒声が響いてきたりした。だから月曜日の朝にはきまってどこかの道端に吐き出された汚物や黒ずんだ血痕がこびりついていた。ある朝などはラーメン屋の店先に親指が捨ててあったという。その親指は血が抜けて青白くなっていたそう。ちょうどそこが近所で評判のラーメン屋だったものだから、あそこは親指で出し汁をとっているからうまいんだという冗談がささやかれたものだ。

そのトンコツならぬジンコツラーメン屋から横道にはいると、ようやく車が一台通れるくらいの細い裏通りが迷路のように蛇行していて、これを50メートルほど下ると僕の住んでいたアパートがあった。そこは2階建ての古ぼけた木造アパートで、入り口には塗装の剥げかけた看板がぶら下げてあって、ラ・フェリシテ(大いなる幸福の意)と書かれていた。その名に恥じないかのごとく、天を目指すほどに急峻な階段がそそり立ち、それを登りきるとすぐ右手にあるのが僕の部屋だった。

部屋には北向きの窓が一つしかなかった。おまけにその界限は家屋が密集していたので、窓を開けると額がつくほどに隣家の壁が近くに迫っていた。そんなわけで部屋は昼間でも独房のようにじめじめと薄暗かった。床や机の上にはほうぼうの古本屋から買い集めた本が積まれていた。部屋の隅に猫の額ほどの流しがり取り付けてあって、そこには洗いかけの食器とか食べ残しのついた弁当箱が散乱していた。それが毎年夏になると異臭を放つので甚だ困った。

そのころ僕はまだ若く、胸には情熱と自尊心とがあふれ、けれども何にもなれずに一人もがいていた。場末の下宿に閉じこもり、その小さな窓から時折のぞく幾何学的な空を見上げながら、なんとか世間があっと驚くような作品を書き上げようと躍起になっていた。そう、そろそろ告白しなければならぬまい。そのころ僕は作家になることを夢見ていた。ここで想像たくましい読者は、都会の片隅でいまだ無名の若き文豪が世に出る機会をじっとうかがう姿を思い浮かべるかも知れない。パリの屋根裏部屋にこもり、昼夜を徹して処女作をしたためたバルザック。あるいはペテルブルグの安下宿で貧困のどん底からあの傑作『貧しき人々』を生み出したドストエフスキー。たしかに定職にもつかずに下積み生活を送っていた点では僕は彼らと同等かも知れない。稼いだ金の大部分は本代に消えてしまい、空いた時間のほとんどを読書に費やしていたのも似てくはない。しかし僕と彼らの間には一つの決定的な懸隔が横たわっていた。僕は今まで一編の小説すら書き上げたことがなかったのである。むろん僕も自分なりに努力はしていたつもりである。登場人物のリストを書き出したり、頭の中で話の筋書きを考えたりしたもの、いざ書き始めると自分のつたなさに幻滅して、筆を投げてしまうのである。過去の偉大な作品と比較すると自分の文章はあまりに凡俗で、その世界は矮小であった。その感を読書を積み重ねるほど深まっていき、要するに読めば読むほど自分で書くことができなくなったのである。そしてついには読書にも飽きると畳の上に寝そべて天井を見つめながら、文名が上がった日のことばかりを夢見ていた。新聞社の連中が、蟻のように僕の部屋に殺到し、次々にフラッシュライトを浴びせかけながら、「新しき漱石の誕生」だとか「太宰の死にぞこない」だとか騒ぎ立てる。次にやってくる出版社の連中は蠅のように手を擦り合わせながら版權をねだるであろう。それまで僕を内心^{さげす}んできた友人たちだって手掌を返し尻尾を振って媚のたたき売りにくるに違いない。だが僕はそんな連中を芸術家らしく毅然と突き返し、手にした賞金でここよりもましな住まいに引っ越して、自己の内面世界のいっそうの彫琢に邁進するのである。そんな空想しては一人でにやにやとうすら笑いを浮かべていた。

今にして思えば、僕のそうした生活は世間から見れば怠惰以外の何ものでもなかっただろう。実際、隣に住んでいた大家のおばさんは僕のことを物陰から胡散臭そうな目でながめていた。そのくせ昼間に通りで会うときはいつも満面の作り笑顔を浮かべて会釈するのだった。だがもし僕が家賃を一月でも滞納しようものなら小躍りして僕を追いつめようとしたことは想像に難くない。

これからお話ししようとするのはほかでもない、こうした自堕落な生活のなかで僕がただ一度だけ自分の胸のうちに高鳴る芸術的な想像力の横溢を感じた日々の物語である。

ある晩のこと、僕は机に齧り付いて相変わらずできもしない小説の構想を練っていた。夏の暑い夜だった。風一つなく、むんむんとした熱気が地表にべったりと張り付いていた。部屋にじっとしているだけで首筋がねっとり汗ばんできて、あまりの湿気のために部屋の空気がゆらゆらとかすんで見えるほどであった。そうして何時間も真っ白な原稿用紙とにらめっこをしていた。額からしたたる汗がぼたぼたと流れ落ちては紙の上にくつもの染みをつくっていた。時折ふとアイデアが浮かんでくることもあった。だがそれを紙に書き記したとたんにひどく陳腐なものに思えてすぐに破り捨ててしまった。行き詰まってしまった僕はついに原稿用紙を放り投げた。しばらくぼうっと宙を眺めて煙草をふかしながら、立ち上る煙が熱気の中にゆらめくのを見つめていた。物音一つ聞こえない、静かな晩だった。ただ時々酔っぱらいのわめき声が遠吠えのようにこだましていた。

それから僕は再び気を取り戻して机に向かい、中断していた習作の短編を書き始めた。しばらくのあいだうなっていたが、驚くべきことにその晩の12時を回った頃から思いのほか筆が進み始めたのである。いつしか作中の登場人物たちが僕の頭から飛び出して動きだし、思い思いに語り始め、それぞれの欲望で互いに絡み合いながらも結末の悲劇に向かって一斉に歩き始めたのである。僕はただそれを紙に記せばよいのだった。夜の静寂の中に、ペン先が紙の上をさらさらと走る音だけが耳を穿った。そうして僕は知らない間に暑ささえ忘れて執筆に没頭していた。

その刹那である。僕は背中に何者かの視線を感じてひんやりとした。開け放った窓の外からじっとこちらを覗き込む二つの眼を感じたのである。僕は恐る恐る窓のほうを振り返った。だが見えるのはただ夏の夜を領する深い闇^{まなこ}だけだった。僕は自分の臆病な想像力に苦笑し、机に向かって書き始めた。その晩は空が白み始める明け方近くまで執筆を続け、この上なく充実した気持で床に就いた。

次の日は昼近くになって国道から響いてくる車の喧騒で眼を覚ました。日はすでに高く、陽光が部屋に舞う埃に反射して一筋の光線を投げ掛けていた。僕は湯を沸かして塩味の効きすぎたカップラーメンを平らげると早速昨晚書いた原稿を手にとってみた。たいていの場合、夜中に書いた文章というものは読むに耐えないものである。だから芽生えかけた恋をてっとりばやく摘み取ってしまうには夜書いた恋文を朝一番で投函するのが簡便である。それはたいてい独り善がりな思い上がった恋心をさらけ出しているからである。ところが昨晚書いたものを読み返してみると、それは依然として自分のものとは思えないくらいの出来映えであった。文章は溪流のように淀みなく流れ、しかも綺麗に整いすぎることなく、要所要所では闊達とした奔流となって読む者を圧倒していた。僕ははじめて自分の未来に明るいきざしを感じることができた。そしてあの視線のことはすっかり忘れ去っていた。

いつも午後からは二駅ほど離れた町までアルバイトに出かけていた。そこは都内有数のベッドタウンで、駅を降りると視界のおよぶ限りの遠くまで高層マンションが林立していた。かつて自殺のメッカとしてあまねく知られ、多くの熱狂的な巡礼者が跡を絶たなかったため、窓という窓には鉄格子が埋め込まれていた。その一角に古い雑居ビルが一つだけボツンとたたずんでいて、その2階に小さな個人塾があった。僕はそこで夜8時まで講師として勤務していた。もともと人から教わることが大嫌いであった僕は当然のことながら人に教えることも大の苦手であった。たいてい教育熱心なやからは多分に漏れず自分に見切りをつけた連中で、せめてもの慰みに自分に似た人間を再生産することで自分を認めない世間に復讐しようとする人種なのだ。というわけで僕の担当クラスにはルソーの自然状態に極めて近い理想郷があった。教室の後ろで雑誌を読みふけったり、授業の途中で抜け出すカップルがいるかと思えば、箒をバットにみたててバッティング練習を始める連中もいた。

最後の授業が終わったあとも僕は適当な用事を見つけては控室で時間をつぶすことにしていた。30分ぐらい経つと隣の事務室からアルバイトのA子が帰る気配がしたので慌てて控室を飛び出した。彼女も同じ駅に向かうので僕はよく一緒に連れ立って歩いた。彼女のほうもまんざら悪い気はしな

いようで、最近はきちんと同じ時刻に帰るようになっていた。この時刻に駅に向かうのは僕ら二人ぐらいで、道行く人はみな僕らとは逆に駅からマンションのほうへと向かっていた。僕は帰る道すがら、今日塾で起ったことや流行りの映画などのとりとめのない話題を交わしながら、暗くなった並木道を歩いた。彼女は平凡な頭の持ち主で、会話は至極退屈であった。ただ彼女は素敵な肉体を持っていた。僕は駅の改札口で別れて別々の電車に乗った。

穴蔵に着いたのは夜の10時を回った時分であった。昼のあいだ閉めきっていた部屋には息苦しいほどの熱気が充満していた。息を吸うたびに気道の粘膜がチクチクと刺激された。昼間の疲れがたまっていた僕は、窓を開けてわずかに涼しい夜の空気を一息吸い込むとすぐさま床に寝転がってそのまま眠りについてしまった。

それから何時間経ったであろうか、僕は背中にねっとりまとわりつく不快感で目を覚ました。起きてみると布団が汗を吸い込んで水死体のように膨らみ、触ると生暖かかった。つけっぱなしにした扇風機のモーターが汚物にたかる蠅のようなうなり声を立てて回っていた。暑さのあまりに眠れなくなった僕は机にむかい、中断していた小説の続きを考え始めた。ところが昨日の快進撃はどこ吹く風か、僕の想像力は皿の海原に浮かぶ帆船のようにハタと立ち止まってしまった。例によってうなったり、煙草をふかしたり、のたうちまわったりしてみたが、僕の想像力の井戸はどうやら一晩で枯れ果てたようだった。もし脳ミソを取り出して雑巾みたいに最後の一滴まで絞り出すことができれば、僕は悪魔とだって契約を交わしただろう。無為に時間が流れていき、気がつく時計の針は既に2時を回っていた。あたりは草木の吐息すら聞こえてきそうなほどに沈黙が支配していた。そのとき一陣の涼風がカーテンを揺らして部屋の中に忍び込んできたかと思うと僕の回りを旋回して再び窓から抜け出していった。その時分から気持が次第に落ち着きを取り戻し始め、頭が澄みきった湖面のように冴え渡ってきた。脳髄という子宮の中で創造の息吹が胎動を始め、やがて力強い鼓動となって脈打ち始めたのである。僕は投げかけたペンを再び手にすると、猛然と紙面を走らせた。あとからあとからあふれてくるイメージの洪水に溺れそうになりながらも僕は必死でそれを書きとめていった。紙面は見る見るうちに黒々とした文字でびっしりと埋まっていった。

その刹那である。僕は昨晚感じたのと全く同じ二つの眼が自分の背中に注がれているのを感じた。^{まなこ}しかし今度は気づかない振りをしたまま、何食わぬ顔でペンを走らせることにした。そうしてしばらく相手を油断させておいて、今度は間髪入れずに後ろを振り向いてみたのである。視線の先には昨日と同じ漆黒の闇が広がっていた。しかし何者かの存在を確信していた僕はあきらめなかった。机の上の電気スタンドをつかんで窓に歩み寄っていき、隅々を照らしてみた。よくよく目を凝らして見ると、窓枠になにやらゴミのような小さな黒い点が張り付いていた。近寄ってみるとそれは虫のようだった。あるいはそいつは虫ではなかったかもしれない。

手に取ってみるとそいつは黒光りする甲羅のようなもので覆われていた。だが、押してみるとバツタの腹のようにぶよぶよと柔らかかった。裏返すと幾対もの細長い足が腹から張り出し、小刻みに波打っていた。頭部にはピンで刺したような小さな穴が両側に開けられて、これが眼だろうと僕は思った。その下に口とおぼしき切れ込みが入っていた。その隙間からは歯のようなもののぞいていた。あるいはそれは舌だったかも知れない。その夜はひとしきりそいつを観察した後、そのまま窓から放り投げた。執筆の疲れが出てきた僕は机に臥したまま深い眠りに落ちた。

それからというもの、夜になるたびにそいつは僕の部屋にやってきた。窓を少し開けているとその隙間からもぐりこんできて、窓枠にペタッと張り付いたまま何時間もそこにじっとしているのだった。そして明け方になって目を覚ますとどこかに消えていた。

いつか、あいつが何者だったのだらうと図書館で調べてみたことがある。あらゆる昆虫図鑑にあたってみたが、結局わからずじまいだった。ここで読者は「なぜ新種の昆虫を発見しておきながら発表しないのか。小説を書くよりもよほどとっぴややく名をあげることができるではないか」と僕

をなじるかも知れない。ああ君たちはなんという俗物であろうか。存在と不在のあいだに横たわる底無しの断絶を乗り越えて、無から形あるものを創造する営みこそが真の個性の発露であり、天地開闢の神の技に比すべき偉業なのである。それに比べて新事実の発見などはわき目も振らないバカ正直さで一握りの運さえあればいかなる凡人にだって達成しうることなのだ。

話をもとに戻そう。2、3日経つとあいつは僕から害を加えられることがないとわかってきたとみえて、窓枠からしずしずと本棚の縁をつたって机の上にまで降りてくるようになった。もともと虫というものは明るいところが好きなものだ。だからきつと電気スタンドの光に惹かれてやってくるのだと思った。だがどうもそうではないようだった。なぜならそいつは机に上がっても決して明るいスタンドの下には寄り付かず、ただ隅の暗がりにはひそんだままじっとしてこちらをうかがっているだけなのだ。ただ虫だとして同じ姿勢を保つのはしんどいと思えて、時おりいくつもある足の何本かを伸ばしては背伸びのようなしぐさをすることはあった。

最初のうちは気になっていたそいつの存在も時が経つにつれてあまり気にならなくなった。だいたい僕は自分のプライバシーに関しては極度に神経質な人で、自分の恋人にだって見つめられるのは願ひ下げなのだ。ところがあいつに見つめられていると逆に心が落ち着くのだ。しばらくして僕はもっと奇妙なことに気がついた。あいつがいると不思議と筆が進むのである。机の隅にたたずんだまま時折触角をピクピクと震わせながら、あいつはずっと僕がペンを走らせる様子を眺めていた。その目には何か恍惚とした表情さえ浮かんでいるように感じられた。そしてなぜかその視線は僕に芸術の靈気を吹き込むのだった。その眼差しにさらされていると、僕の神経は高まり、かつてなく研ぎ澄まされ、深い精神の表現がよみなく紙面に刻み込まれていくのだった。

あるとき僕はあいつを餌付けしてみようと思いついた。最初は流しに放置してある残飯をつまみあげてそっと目の前に置いてみた。あいつは興味を示すどころか、残飯の放つ腐臭に耐えかねてそそくさと顔をそむけた。次はわざわざ近所のスーパーまで足を運んで餌を仕入れてきた。夜になってあいつがやってくるとさっそく掌にのせた。そうして買ってきたレタスの葉をはじめ、小麦粉や挽き肉などさまざまな食べ物を試してみた。だがあいつはやはり見向きもせず、そっぽを向いたままのそのそと掌の上をはいまわっていた。そうこうするうちに僕はあいつの餌付けをあきらめてしまった。ところがしばらくしてあいつの好物が発覚したのである。

あるとき僕は身をかがめて足の指の爪を切っていた。パチンパチンという音とともにポロポロと爪の破片が敷かれた新聞紙の上に落ちていった。すると驚いたことにあいつはしゃしゃかと足を動かして新聞紙の上に這上がってきた。なにをするかと見てみると、なんと切ったばかりの爪をむしゃむしゃと食べはじめたのである。爪はよほどの好物と見えて、何度も噛むものだからしまいにはねちゃねちゃとした音が聞こえて、ドロドロにとけた液体が口元から漏れて新聞紙の上に垂れてきた。僕はその貪欲な姿を見て、寝ている間にあいつが僕の布団に忍び込んで爪を全部むしゃむしゃと食べてしまうのではないか、という想像が頭をよぎった。しかしあいつに食べられるのならそれも悪くない気がした。

こうして1週間ほどが過ぎ、めずらしく雨の降る夜が三日ほど続いた。雨はきまって夕陽が落ちる頃から降り始め、毎日のように一晩中降り続くのだった。このおかげでいつもの暑さは幾分おさまったものの、きまって真夜中を過ぎた辺りから小雨に転じ、そうすると今度は蒸発した雨水が猛烈な湿気となって部屋中に充満した。

あいつもこの湿気はいささかたえると見えて、触角を垂らしじっと甲羅を丸めたままこちらをみていた。執筆中の我が傑作もいよいよ佳境にさしかかろうとしていた。だが蔓延する堪えがたき湿気のせいか、クライマックスの描写だけはあいつに見守られていてもなお難航を極めていた。肌に張り付くような湿気に僕の集中力は寸断され、雨樋を流れ落ちる雨垂れの音に僕の思考は掻き乱された。この三日間というものの、毎晩机に向かいながらもようやく1ページほど進むことができたに過ぎなかった。そうした状況を前にして、最初のうちはあいつの靈力もいよいよ底をついたのではな

いかという不安が頭をかすめるに過ぎなかった。しかしそれはやがて、そもそも最初から虫なんぞにそんな霊力などなかったのではないかという疑念へと姿を変えていった。そしてしまいには結局のところ執筆が行き詰まっているのは自分の技量の限界を端的に示しているに過ぎないのではないか、という懐疑心が頭をもたげてきたのである。握っていたペン先から一滴のインキがしたり落ちると、瞬く間に真っ白い原稿用紙に黒い染みが広がっていった。僕は思わず受話器を手にとるとA子の部屋の電話番号を回していた。

電話口のA子はちょっと驚いたふうであったが、すぐに僕らはいつもの調子で話しはじめた。僕は好機を見計らってデートの約束を取りつけた。そのあとも夜中過ぎまで取り留めのない会話に興じていた。電話を切って振り向くといつのまにかあいつは僕の部屋から姿を消していた。

それから数日経ったある晩、大学時代の友人Cが僕の下宿を訪ねてきた。彼は大学の修士課程に籍をおき、仏文学の研究者としての道を着実に進んでいた。僕らは近くの定食屋でいっしょに飯を食い、下宿に戻ってくるとビールを飲みながら学生時代のようにひとしきり文学やら哲学について語り合った。夜も深まってくると話題も次第に核心へと吸い寄せられていった。

「で、君これからどうするつもりだ」

どうやら今回の訪問の目的はここにあるらしかった。地道な研究者肌の彼にしてみれば、さしたる理由もなく大学を飛び出した僕の生き方は侮蔑の対象であった。と同時にそこには僕の奔放で無責任な生きざまに対するいくばくかの憧憬が混じらないではなかった。それを見抜いていた僕はちょっと勿体ぶった間をおいてから

「うん、いま小説を書いている」

とだけ答えた。だがCはそれでは飽き足らず、さらに一步踏み込んできた。

「それは文学として価値があるのか、それとも商品として売れるのか」

「たぶん売れない。価値があるかどうかは、書いている自分にはよく分からない」

「それは逃げ口上に聞こえるな。本当に価値があるなら、書いていて自覚できるだろう」

この言葉に僕は内心穏やかではなかった。一瞬、書きかけの小説をCに見せてやろうかとさえ思った。しかしCは辛口の文芸批評で文壇に頭角を現し始めていた。そんな彼に対して、完成が危ぶまれる習作を見せるには気が引けた。そのかわりに僕はあの奇妙な虫のことを話題にのせた。だがCは虫の話には全く興味を示さなかった。それどころか黙ってじろじろと僕の顔を眺めていた。

Cはその夜は長々と居座って勝手に自分の文学論を披露したあと、終電まぎわになってようやく腰をあげた。

「お前、一人で酒を飲む癖があるならほどほどにした方がいいな。アル中になるとよく虫の幻覚を見るって何かの本に書いてあったぞ」

Cは帰り際にこう言うと、コートを羽織って出ていった。

あいつはその晩、全く姿を現さなかった。

その頃から執筆は全く捗らなくなった。次第に僕は机に向かうことが少なくなり、依然のように無為に過ごす日々が増えていった。執筆が行き詰まるのに反して、A子と夜遅くまで長電話に更ける

夜が増えていった。そんなときはあいつは部屋の外からじっとこちらを眺めているだけで決して中に入ってこなかった。あいつのピン穴のような目から注がれる視線も今では自分の無能に対する冷やかな侮蔑のように感じられるようになっていた。

ある晩、A子との逢瀬を終えて部屋に戻ってきた。出がけに閉めたはずの窓がいつのまにか半開きになって、秋を告げる風がカーテンを揺らしていた。

僕は煙草を吹かして密会の甘い余韻に浸っていると

『いままでどこに行っていたんだい』

と耳の奥の方でかすかに響いた気がした。僕はついに気がおかしくなり始めたか、と思ったが、それもまたよかろう開き直った。さほど気にもめずに畳の上に寝そべると、読みかけの小説を手にして枝折りを挟んであったページから読みはじめた。だが、ページを目で追っているだけでちっとも頭に入ってこなかった。蠅がどこかの隙間から入ってきたらしく、電灯の回りをぶんぶん飛び回っていた。

窓に目を向けると、あいつが窓枠にへばりついたままこちらをじっと見ていた。ふとさきほどの幻聴を思いだし、もしかしたらこいつがしゃべっているんじゃないだろうか、と考えた。まさかとは思ったがちょっと気味が悪くなって、あいつをつまんで外に放り出した。そして窓をびしゃりと閉めた。

その日以来あいつは決して部屋の中には入ってこなくなった。ただじっと窓の外からこちらをうかがっていた。

その週末についに僕はデートのあとにA子を部屋に連れ込んだ。部屋の中はすこし暑かったので僕は窓をわずかに開けて風を入れた。隙をみて僕は彼女のふくらんだ胸の中に手を差し入れた。柔らかく生ぬるい感触が掌いっぱい広がっていった。それは僕の報われない情熱をひとときだけ慰めるだけの仮の器であった。

「やめて」

彼女はあえぐように言った。その瞬間、僕の背中に冷やかな視線が突き刺さった。

『ふん、そんなんじゃとてもダメだね』

その声を耳にしたとたん僕は反射的に窓を振り向いた。振り向きざまに視界に飛んできたのは案の定あいつだった。いままで無意識の底に鬱滞していたどす黒い感情が奔流となって止めどなく噴き出してきた。

「いい加減にしろよ、この野郎！！」

僕はこう叫ぶなり、そばにあった定規をつかみ、その角でやつの背中を力一杯たたきのめした。やつの背中にはぱっくりと割れ、割れ目から黄緑色をした体液がにじみ出てきた。果物と糠味噌がいっしょに腐ったような、なんともいえないくさい臭いが鼻粘膜を刺激した。僕はあいつを定規の先で弾き飛ばして、窓から放り投げた。あいつは向かいの家の壁に打ち当たり、緑色の粘液が弧を描いてゆっくりと下の方へと落ちていった。

振り返ると彼女は僕の行動を凝視していた。その顔は能面のように無表情であった。そして次の瞬間、踵を返して部屋から飛び出していった。

明るく朝、僕はあいつが落ちたはずの場所を探してみた。あいつの姿はどこにも見当たらなかった。ただ壁には一点の染みがこびりついていた。

夕方、塾にしてみると彼女の態度はひどく冷淡なものに変わっていた。彼女はたぶん僕のことを気違いだと思ったのだろう。それもやむをえないだろうと、自分を慰めた。

あの夏から数十年の歳月が夢のように流れ去った。その後若干の紆余曲折はあったものの、僕はまがりなりにも文筆業に就いた。もちろんしがない三流作家で、いかがわしい雑誌に好色な連載小説を載せているにすぎない。とても大作家になれる器ではないことはあの頃からうすうす気付いていた。これはこれでしょうがないと達観さえするようになっている。家には初老を迎えつつある妻と来年結婚を控えている娘が一人いる。ささやかだが人並みの人生であったと 今では自分に対して安らかな満足感すら感じるようになった。

読者はあのとき書きかけていた小説の顛末が気になるかも知れない。あの小説はあいつがいなくなったあともいつの日か完成させようと大事に持っていたが、度重なる引っ越しの際にどこかに紛失してしまった。

今でも秋の夜長に机に向かっていると、ふと窓を振り向くことがある。もしかしたらあいつが窓枠に張り付いているのではないかと。だがあいつは二度と僕の前には現れなかった。